

協働ファシリテーター 実践のしおり



目次

はじめに	-----	1
協働のプロセス	-----	2
本紙の読み方	-----	3
ファシリテーターの心がまえ	-----	4
事例紹介 【長門市】NPO × 企業の協働 ①	-----	5
【山陽小野田市】NPO × 企業の協働 ②	-----	10
【山口市】NPO × 企業による協働のしくみづくり	-----	14
【山口市】NPO × 大学 × 企業などマルチな協働	-----	18
【防府市】NPO × 教育機関の協働	-----	24
古賀桃子さんからのコメント	-----	29
本紙作成にあたっての参考文献・資料 / 付録	-----	30



はじめに

わたしたちの暮らしは以前にもまして多様になってきており、行政サービスだけで地域住民の求めにきめ細やかな対応をすることは困難になっています。そのような中、山口県では、人口減少が一層深刻さを増しており、地域の担い手不足の進行により、コミュニティ機能が低下するなど、さまざまな課題に直面しています。

地域の課題や困りごとが多様化・複雑化してきている中、それらの解決を図るためには、地域の実情に精通した県民活動団体や専門性のあるNPO、行政機関、事業者、企業といった多様な主体が目的を共有し、それぞれの得意分野で能力を発揮しながら協働・連携して課題や困りごとの解消に取り組み、よりよい地域づくりをしていくことが欠かせません。

そうした協働のメリットはさまざまに波及します。

一つの組織ではできなかったことが他の組織と協働することでできるようになったり、単独で行うよりも効果的な成果が上がり、課題解決をいち早く導けるようになったりします。また、立場の違うさまざまな組織が協働・連携することで、ものの見方や考え方の幅が広がり、それぞれの組織の活動も充実していきます。

協働にはさまざまな形があり、そのつながり方、つなげ方もさまざまです。地域における協働の組み合わせも、行政とNPOの二者協働だけではありません。県民活動団体、小中学校、高校、大学、企業といった地域にある多様な主体が、目的に合わせてさまざまな形と数でつながることができるのです。

山口県では、「協働ネットワーク強化による県民活動促進事業」を実施して、県民活動団体が多様な主体と協働できる体制を整備し、協働による地域課題解決に向けた取組を推進するとともに、県民活動を通じた人と人とのつながりによる地域の絆づくりを推進してきました。

その事業において市民活動支援センターの皆さんが習得した知識や技能、ネットワークを活用し、実践した協働事例を取りまとめたものが、この「協働ファシリテーター実践のしおり」です。協働の促進に臨む方々が、ファシリテートのプロセスに着目して参照できるツールとなっています。

このしおりが今後、さまざまな協働の促進やみなさんの地域課題解決における一助となれば幸いです。

協働のプロセス

促進・支援するケース

想定されるシチュエーション

一言メモ



1

何かしらの問題・課題があることを知る・把握する
(組織課題、地域課題など)

- ・相談対応業務で、相談者から直接問題を聞きとる。相談者自身が自覚していない問題を察知する
- ・団体交流会や意見交換会を行う中で問題が見える
- ・地域情報紙などから特定地域の問題状況を知る

協働は「問題・課題解決の手段」と言われるように、まずは解決したい問題・課題の存在やその内容を、日頃の業務を通じてキャッチする。



2

協働の要不要や効果性を吟味・検討する
→協働という手法が有効かどうか、どういった協働が必要かを確認・検証

- ・個人ワーク、またはセンターの役員や外部の支援者などとの話し合いの中から、問題解決のために「複数の主体による連携協働」が有効かどうかを検討する。
- ・課題解決に必要な協働の関係者、または関係者が持つ資源や専門性を想定する

把握した問題への解決には、一定の資源や専門性などが必要と見込んだら、その資源を持つ主体や組織に向けて働きかけてみる。



3

組みたい・関わりたい主体に働きかける

- ・登録団体や業務の関係先で知り合った各主体に対し、協力や参画の呼びかけ(または話合いの設定)をする(→ネゴシエーション)

呼びかける相手に関わってくれる動機を探る。その際に、ネット等で呼びかけ相手の現状や重要視していることなどの情報を仕入れてみる。



4

組みたい・関わりたい主体同士が話し合う場を設ける
(双方をつなぐ、組み合わせる)

- ・関係者が集う会合や意見交換の中で、ワークショップを交え、各主体の意向や状態を見える化・共有する(→コーディネーション、会議ファシリテーション)

各参加者の強み(提供できる資源、協力できること)各参加者の弱み(不足しているもの・悩みごと)、または、各者のミッションや当年度重要事業などを棚卸しして、「つながり」ポイントを探る。



5

複数の主体の協働による取組みを支援する
(事業化、事業の進捗管理)

- ・各主体が協働で取り組むプロジェクトに協力者などの立場で参画。
- ・MTG会場貸出し、スケジュール管理、議事録作成、情報発信協力、助成金等の情報提供などさまざまな形での実務的な関与がありうる。

各主体によって、当たり前で共有されていると考える常識・ルール・マナー・言語・文化が異なる可能性もあり、その齟齬が基で協力関係が破綻するリスク有。それらの齟齬の解消や予防なども重要。



6

協働で実行できた取組みに関して情報を発信・共有する

- ・プロジェクト内部で話し合ったことや実務の進捗状況について情報共有を図るケースもあり。
- ・プロジェクトの実施予定事業の広報や、実施した事業内容の報告(情報発信)の協力を行うことも。

近年はITツールを活用して関係者内部で情報共有できる手法を活用、またはそれらを紹介することが多い。ただし関係者の性格によってツールの活用にも制限があることも(例:IT苦手な団体)。また、広報のツールやルートの紹介もありうる。

本紙の読み方

本紙は、山口県内の各市民活動支援センターで取り組まれた「協働ファシリテーション」(※)の取り組み事例や、そこで見受けられるノウハウを掲載したものです。

(※)本紙では「(協働)ファシリテーション」という言葉を以下のような意味合いで用いています。

人々が関わり繋がることや、協働による取り組みなどを支援・促進すること

(参考:徳田太郎・鈴木まり子『ソーシャル・ファシリテーション』)

また、掲載にあたっては「協働ファシリテーションのプロセス」を以下のように掲げ(詳細はp2参照)、このプロセスに応じて複数の事例を紹介しています。



協働を進めるにあたって特定のプロセスに課題や行き詰まりを感じる方は、各事例ページの気になるプロセスの箇所をピックアップしてみる、という読み方もできます。

(たとえば、「各主体に協働を呼びかける時にうまくいかない」と思われる方は、各事例において「協働への声かけ」という項目の記事をチェックする、など)

なお、本紙作成にあたっては特に『くらし×〇〇 つなぎの手帖』(認定特定非営利活動法人日本NPOセンター、特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター)を参考にさせていただきました。本紙の最後には、ふくおかNPOセンター代表の古賀桃子さんから各掲載事例に対していただいたコメントを掲載しています。合わせてご参照いただければと思います。古賀さんには、本紙作成に向けて貴重なご助言やご協力を賜りました。深くお礼申し上げます。



ファシリテーターの心がまえ

「困りごととは身近にある」という気持ちで

困っている人は皆相談するわけでもなく、自分の中に抱え込み目に見えて明らかでないことも多々あります。会話を通じて、相手方にどのような背景があるのか想像をめぐらしましょう。

地域のさまざまな動きに関心を

地域課題というものは日々変化を見せています。地域の状況とそれに対する官民の動きには日々アンテナをはっておきましょう。地元紙や行政の発行物、地域福祉計画なども地域の動きを知る参考になります。

既存のつながり先や制度について予習を

マッチングやコーディネーションに際しては、当事者に関係する機関との関係づくりや情報共有は不可欠。確認は密にしましょう。自分たちの得意と不得意を把握し、貢献ポイントを見つけ出していきます。制度について調べ、状況を把握しましょう。わからないことはその場で聞きましょう。

日頃から、異業種を含む多様なつながりづくりに努めておきましょう

一見、関係ないと思える組織・個人でも、いつ、どこで、どんな活動がパートナーとなりうるのか可能性は想定を超えて広がっていきます。まちづくり・地域づくりに関連する会合には極力顔を出しておきましょう。つながりが多様であるほど、いざという時に大きな宝になります。つながりの持続のためには、SNSも有効です。

(参考資料/認定特定非営利活動法人日本NPOセンター・特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター発行『つなぎの手帳』)



心がまえ・番外編



雑談力と応用力

協働のつなぎ手としていくつもの実績を持つスーパーファシリテーターが共通してもっているのが、「雑談力」と「応用力」です。

「何か困ることがありますか?」と尋ねるだけでは拾いあげることができない「困りごと」、当事者自身も正確には掴みきれていない「困りごと」は、普段の何気ない雑談の中に隠れている、とスーパーファシリテーターたちは認識しています。そのため、日頃からさまざまな団体とのつながりを持ち、何気なくかわしている会話の中からそうした「困りごと」を見つけだし、解決のための協働へとつなげていくことを大切にしています。

また、「これ、いいな!」と思うような協働の事例に出会ったとき、スーパーファシリテーターたちが考えているのは、「その取り組み、自分たちの地域でも応用して実践できないか」ということです。成功事例との出会いは、新たな協働を思いつく絶好の機会と捉えてほしい、と彼らはいいます。例えば、「内容を変えたら、この県民活動団体とスポーツチームの協働は自分たちもできるな…」「中学校との協働実践だけど、小学校でもできそうだな」等々、「つなげる先」や「つなげる視点」を自分の地域の現状に合うよう少しだけ変えて応用すれば、地元で必要とされている協働に生まれ変わらせることができるから、と。最後に、「協働の声かけは、ダメもと…の精神で。もし断られても、それは新たなチャレンジへと方向転換する良い機会だと捉えればいだけ」というアドバイスも。

「雑談力」と「応用力」を鍛えてつなぎ手の能力を伸ばし、スーパーファシリテーターを目指しましょう!!

話し合いを重ねて得意技を組み合わせる

子どもまんなか防災ネットワーク × 株式会社キロク



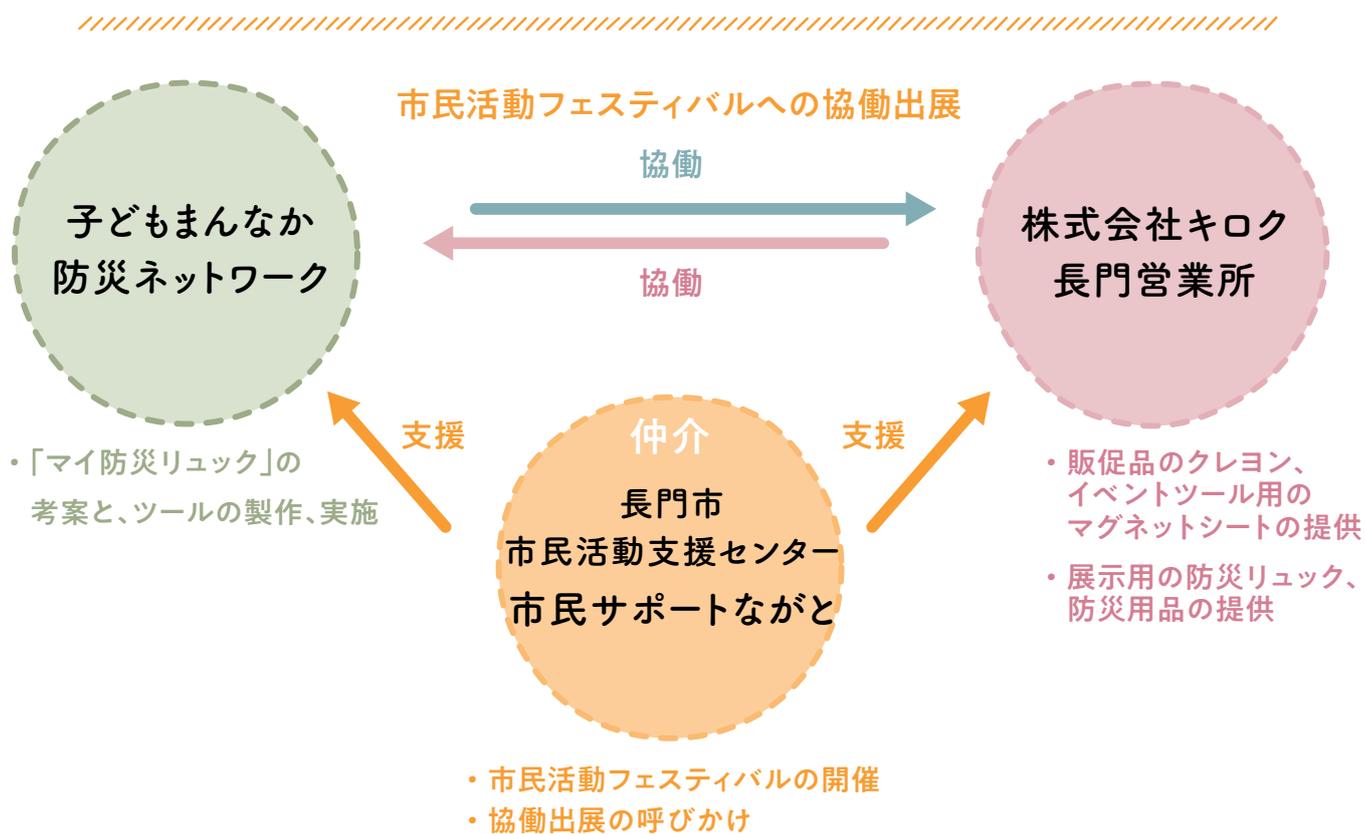
協働の概要

市民活動支援センターが主催するイベント「市民活動フェスティバル」に、センターからの声かけで、防災をテーマに活動している市民活動団体と、長門市と防災協定を結んだ企業が協働し、防災について学ぶ子どもむけのワークショップを出展した。

長門市市民活動支援センター 市民サポートながと

2023年の開設以来、市民協働によるまちづくりを進める中核的支援拠点として、長門市民を対象に講演会や各種講座、イベントなどを定期的に開催し、市民活動支援センターについての周知を図っている。社会課題の解決のため市民活動団体への支援を行うとともに、地域に積極的に入っていく地域課題の解決や地域のコミュニティ活動の支援にも注力しているのが特徴。公設公営での2年を経て、2025年春には民営化の予定。

登録団体：23団体（2025年3月現在）



子どもまんなか防災ネットワーク

能登半島地震をきっかけに、子どもたちに防災を通して「命を守ること」の大切さを伝えることと、防災を通して大人と子どもが集える地域づくりを考えたいと、民生委員・児童委員、防災士や保育士などが集まって2024年1月に設立。「あそぼうさい まなぼうさい」をテーマに、遊びを通して子どもたちが防災を学ぶ場づくり、防災に関する知識に専門家を交えて気軽にふれてもらえる場づくり、子育ての相談や情報交換などが気軽にできる場作りの3つを中心に活動を展開中。

株式会社キロク

建設機械、ICT建機、医療福祉用具のリース・販売・修理、ドローン事業を手がける。医療や介護・福祉などの資格保有者やドローン操縦の資格保有者を有するという自社の専門性を活かすべく、地元自治体との防災協定にも積極的に取り組み、建設機器、簡易トイレやADEなどの医療機器・福祉用具といった応急対策資材の供給、ドローンによる被害状況の把握などを行って、災害現場での迅速できめ細やかな対応に努めている。学校や自治体、市民向けのAEDの使い方や救命処置などの安全講習も行っている。

きっかけ

2024年9月

長門市市民活動支援センター「市民サポートながと」の主催イベントを秋に開催することが決定する

つなぎでのヒント



市民サポートながと
専門員
杉山 裕絵さん

市民活動フェスティバル2024「たしなむSDGsながとの秋」と名付け、「市民活動・SDGsについて一人ひとりが考えるきっかけをつくる」「子育てと仕事のワークバランスについて学び、子育て中の人たちの交流促進を図る」ということを開催目的に掲げていました。

困りごとの発見

「市民サポートながと」では、これまでも社会貢献活動や市民活動の裾野が広がるようなイベントを定期的で開催してきてはいるものの、今ひとつ市民の中に「市民活動支援センターは何をすることでいいのか」という情報が定着していないという思いを抱えていた。

参加者に市民活動やセンターについての理解を深めてもらうためにも、SDGsにマッチするような内容で、市民活動団体やNPO、また普段はそういうところとは協働をしない企業など多様なステークホルダーが市民活動フェスティバルのイベントの中でなにかを協働して市民活動をアピールできないだろうかという思いがありました。

つなぎ先・つなぐ視点

イベントでの団体の協働を模索していた時、「市民サポートながと」は「防災」というキーワードでつながる2つのステークホルダーを思いつく。

つなぎでのヒント



① 子どもまんなか防災ネットワーク

「子どもまんなか防災ネットワーク」さんは、子どもと一緒に防災を通して大人と子どもが集える地域の場づくりを考えるため2024年1月に設立された市民活動団体で、いろいろな活動を展開されていることに注目していました。会員さんの専門性を活かしたオリジナルの活動メニューを作って進んだ活動をされているという印象がありましたし、これまで防災をテーマにした団体は長門市にはなかったと思ったので、今回のイベントに出ただけであれば防災を活動のテーマにした団体があることを知っていただくよい機会になるのでは、と考えました。

② 株式会社キロク

「防災」というキーワードを思いついたとき、株式会社キロクさんが2024年8月に長門市と防災協定^(※1)を結ばれたことが頭に浮かんできました。

※1) 長門市と株式会社キロクの防災協定について

災害の発生またはその恐れがある場合に備え、応急対策資機材の供給体制を構築し、被害の防止・早期復旧を図り、市民の安全・安心をより強固なものにするというもの。長門市内で地震や風水害などの災害が発生した際、被害の拡大防止と早期復旧を目指して土木機械や発電機などの応急対策資機材を素早い供給、オペレーター付きドローンによる被害情報の把握などが盛り込まれている。

協働への声かけ

「市民サポートながと」は、「子どもまんなか防災ネットワーク」と株式会社キロク長門営業所に、「防災とSDGsについて体験しながら学ぶしくみづくり」を2団体で考え、秋のイベントに協働で出展しないかと呼びかける。

つなぎでのヒント



「協働」への第一歩は当事者意識を持つことだと考えます。つなぎ先として思いついた2つの団体は、いずれも活動の柱の一つに「防災」を掲げておられます。この2団体で何か協働できたら、防災という地域課題の解決に役立つものが出来るのではないかと、また市民に市民活動をアピールするよい機会になるのではと思いました。

つながりてコメント



子どもまんなか防災ネットワーク
代表
山近 弘恵さん

両者にお声かけしたところ、「子どもまんなか防災ネットワーク」代表の山近さんと株式会社キロク長門営業所長の上岡さんは建設業という本業を通じて既知の間柄であることが分かり、「防災」に対する思い、地域や子どもたちに対する思いに多くの共通するものがあると感じたので、今回の協働は上手いくのではと思いました。

キロクさんには仕事の関係で毎日のようにお世話になっていて、いただく情報やホームページから会社として防災に力を入れておられるのが分かりました。それで所長さんにお会いした時に会の活動の話したら共感してもらえて、「いつか何かコラボができればいいね」という話になって。それからひと月もしないうちにセンターから今回の協働の話をもらったので、いい機会だなと思い協働に向け会で動き始めることになりました。

つながりてコメント



株式会社キロク
長門営業所
所長
上岡 大輔さん

重機や医療・福祉機器のレンタルなどで社会に貢献する会社なので、自社で所有する機材やノウハウを災害復旧や防災に役立てたいという思いを持っています。今回センターさんからお話をいただいた時、「地域を守りたい。子どもたちの命を守りたい。防災に関する知識を広めたい。そのために自分たちにできることをやろう」という思いをお互いに持っているな、と思えたことが協働をお受けするきっかけになりました。

協働のステップ

Step 1 「市民サポートながと」によるファシリテート 話し合いの場の設置

2024年9月26日

「防災」をテーマに市民活動フェスティバルのイベントの中で何か協働できないか。市民サポートながとが間に入って2団体が話し合う場を設け、案を出し合った結果、テーマは「好奇心と防災～あそび防災～」に決定。

つながりのヒント



市民サポートながと
専門員
杉山 裕絵 さん

イベントでの協働は、防災リュックを展示し、必要な防災グッズについてマグネット塗り絵などを利用して、遊びながら学ぶ形で行おうということになりました。子どもたちが新しい発見をすること、楽しみながら学ぶことを目標としました。

Step 2 「市民サポートながと」によるファシリテート それぞれの団体の専門性〈強み〉と 困りごと〈課題〉の整理

「市民サポートながと」のファシリテートにより、協働内容をプランしていくために必要な、それぞれの団体の「出来ること」と「課題となっていること」の整理を行なった。



どちらも元々力のある団体さんだったので、この後は2団体さんがほとんど自分たちの力で協働を進めてくださいました。センターとしては、進捗や困りごとがないか等の確認の電話を時折入れるくらいでありお手伝いをすることはありませんでした。

① 子どもまんなか防災ネットワーク つながりコメント

子どもまんなか防災ネットワーク
代表
山近 弘恵 さん



- 私たちの強みは、民生委員・児童委員、防災士、保育士、地域で活動している人などさまざまな専門分野での経験を持っていることで、その専門性を活動に活かしてきました。
- 全員がNPOや市民活動の経験者で、課題解決が早いのもうちの強み。与えられた「課題」は「苦労」ではなく「チャンス」と捉えています。今回の協働もチャンス、と。
- あえて課題として挙げるならば、活動資金。私たちは当面、助成金をもらって大掛かりなことをするのではなく、自分たちで出来る範囲で出来ることをやっていく方針。今年の活動資金は、自分たちが出し合う会費と共同募金の地域配分金を活用した長門市社協の団体助成(使途限定なし)くらいだったので協働にかけられる費用は潤沢とは言い難い状況。
- 会員はいずれも多忙で、全員で集まる時間がとれない、協働にかけられる時間は限られるということも課題といえば課題でした。

② 株式会社キロク つながりコメント

株式会社キロク 長門営業所
所長
上岡 大輔 さん



- 弊社の強みは、リース会社なので重機や福祉機器などの会社からの最新の情報が集まってくる環境にあること。そうして得た情報をもとに、自社所有の機材を災害復旧や防災時に役立てる方策やノウハウを常に考え、もしもの時に使えるように備えています。
- しかし、非営利団体ではなく企業なので、単独で市民向けのイベントに出て防災の知識などを紹介する機会はありません。長門市との防災協定締結もこの話をいただく直前だったので、地元の民間とのつながりもまだありませんでした。
- イベント会場での災害に役立つ重機や福祉機器の展示、子ども向けの重機のシュミレータの出展などの経験はあったのですが、今回の協働は屋内の限られたスペースなのでそうした自社のツールが使えない。時間がない中、子どもが喜ぶプランを一から考えるのは難しいな、と思いました。

Step 3 協働内容の役割分担決めと調整

イベント出展にむけて具体的な準備をする協働がスタートしたものの、2団体ともメンバーが多忙で両団体揃っての打ち合わせ会議は開催出来ず。協働のイベント準備にさける時間にも限りがあるため、それぞれの団体内で協議した内容を代表間の打ち合わせですり合わせしていくことになった。

つながりコメント



市民活動団体との協働は経験がなかったので最初は何をしていいのかわかりました。が、お互いがフェアでWin-Winになるには?と考えたことで、お互いが出来る範囲で出来ることをやっていこうと役割分担することができ、スムーズに進めていけるようになりました。

「経験値がない屋内での子ども向けの活動を考えるのは経験値のある『子どもまんなか防災ネットワーク』さんに任せる」「補えることがあればやるし、出来ることをやっていく」としました。

山近さんには、「もし会の方で何か困っていることがあれば、サポートするから何でも相談してよ」と伝えました。実際にイベントの準備を初めてみると色々話し合う必要も出てきて、短時間でも話し合う機会を設けるよう努めました。



Step 4 イベント出展に向けて

調整が進み、イベントの出展内容が決定。「子どもまんなか防災ネットワーク」は来場した親子向けにオリジナルで考案した「マイ防災リュック」(※2)と題したというアクティビティを実施し、その側で株式会社キロクが防災リュックの実物を展示して、親子で防災について学んでもらうことに。

2024年11月9日

「たしなむSDGs ながとの秋」に、「好奇心と防災～あそ防災～」をテーマに2団体で協働出展。来場者に防災について楽しみながら学んでもらった。



つながりてコメント



子どもまんなか
防災ネットワーク
代表

山近 弘恵 さん

今回一番苦労したのは、短期間で協働内容を決めなければならないことでした。まず自分たちのやりたいことが整理できてなかったし、キロクさんどう役割分担してコラボしていくかを考えるのが難しく、ギリギリまで模索することになりました。

キロクさんには、準備段階でいろいろ出てくる困りごとを都度都度相談させてもらえたので、解決も早くてすごく助かりました。お互い時間のない中、電話や本業で顔を合わす機会を利用して手短に打ち合わせ、さまざまなことを調整していきました。両団体が同じ目線、同じ思いで協働に取り組んでいたのも何でも話ができたし、相手の相談を受け止めることも出来たのだと思います。

つながりてコメント



準備を進める中、イベントで使うツール作りにマグネットシートが、そして当日の塗り絵用にクレヨンが必要となりました。しかし、会の活動費でそれらを賄うのは厳しかったのでキロクさんに相談させてもらったら、「うちに販促品があるのでそれを活用しましょう。マグネットシートもうちで提供します」と。大変助かりました。キロクさんの提供がなかったら「マイ防災リュックと題して」は実施できなかった。

つながりてコメント



株式会社キロク
長門営業所
所長

上岡 大輔 さん

イベントに必要なツールの相談とともに、「子どもまんなか防災ネットワーク」さんから「防災用品のイラストに塗り絵をするので、そばに本物の防災リュックを展示して見てもらえるといいと思う」という相談があり、だったら弊社が持っている防災リュックとその中身を展示しましょう、と。加えて、せっかくの機会だから防災用品の体験も、ということで、保温アルミシートの現物を用意して来場の親子に実際に羽織って暖かさを体感してもらうのはどうか、と提案しました。

つながりてコメント



まず、子どもが「マイ防災リュック」で防災用品の塗り絵に取りかかる。すると親はその側にくるので、防災リュックの実物を見ることが出来る。そういう形で親子の両方に楽しんで防災を学んでもらえてよかったと思います。

「マイ防災リュック」では、親ではなく子どもが必要な防災用品を自分で考えて選ぶので、防災を自分ごととして捉えられるようになるのではないかと考えています。今回のイベントでもしもの時に必要なものについて考えたり防災リュックを見たりした経験が、災害が起きたときに役立つとすればいいなと思っています。

塗り絵はマグネットにして、お土産で持ち帰ってもらえるようにしています。このひと工夫で、イベントで楽しむだけの一過性のものでなくしました。自宅に持ち帰った後は冷蔵庫などに貼ってもらって、子どもたちがイベントで考えたことを思い出したり、家族の中で防災の話題が出てくるきっかけになってくれるといいなと思っています。

つながりてコメント



防災リュックや防災用品の実物にふれる機会は、購入をしない限りあまりないと思います。実物に触ってもらって防災用品の機能を体感してもらうことで、まさかの時に必要な備えをしてもらえるようになったらいいなと思っています。

「子どもまんなか防災ネットワーク」が考案した アクティビティ「マイ防災リュック」って？

1. 塗り絵用に防災リュックに入っている防災用品の5cm四方のイラストを10数種類用意し、「もしもの時に自分が防災リュックに入れて持っていくものはどれ?」と子どもたちに考えてもらい、必要と思う防災用品を2、3点選んでもらう。
2. 選んだ防災用品に好きな色を塗ってもらいながら、それを選んだ理由を尋ねたり、「もしもの時に本当に必要なものは何だろう?」といった話をする中で、塗り絵を楽しみながら防災について学んでもらう。
3. 塗り絵の裏はマグネットシートになっているので、自分で色を塗った防災用品のイラストは自宅に持ち帰り、冷蔵庫など普段目につくところに貼って活用してもらおう。

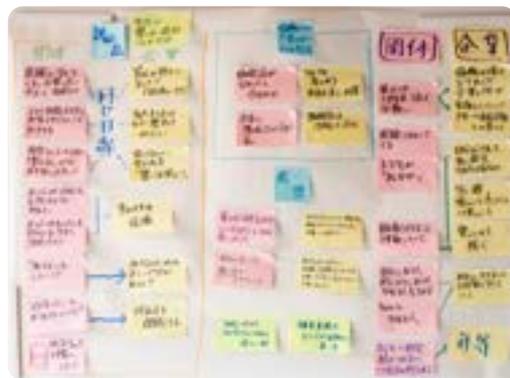


つながりてコメント



子どもまんなか
防災ネットワーク
代表
山近 弘恵 さん

「マイ防災リュック」を思いついた当初、5cm四方の塗り絵は小さい子には難しいかもと悩んだのですが、保育士をしている会員から「大事なものは、子どもが自分で選んだ色で好きに塗り絵を楽しむこと。はみ出すのは問題じゃない」と助言があり、そのまま進めていくことに。会員が自宅で切ったり貼ったりと非常にアナログな手法で作ったツールですが、子育て中の会員のアイデアなども入れ試行錯誤して完成させた自信作です。



協働を終えて・・・

子どもまんなか防災ネットワーク

協働は初めてでしたが、やってみて本当に良かったなと思いました。私たちの団体だけでは出来なかったことが実現出来ましたし、協働することで新しい視点が生まれ活動のメニューが広がるのが分かりました。つながることの大切さも改めて感じました。困りごとが出てきた時、相談する相手がいることもありがたかったです。災害が起きても生き残るための知恵「防災」は、子どもの頃から学んでいないと身につかないと思います。「また防災か…」と飽きられないよう、これからも手を変え品を変え、いろいろなところとつながったりしながら、自分たちの出来る活動を地域で続けていきたいです。

長門市市民活動支援センター

センターとしては、今回の協働は、大成功だったと感じています。参加してくれた子どもたちや保護者からは、「楽しかった」「またぜひ参加したい」という声が寄せられ、実際に楽しんでいる様子がとても印象的でした。そして何より、協働した団体同士からも満足度の高いフィードバックをいただけたことが嬉しかったです。

また、目標としていた「防災について遊びながら学ぶ。新しい発見をする」ということが実現できていたと思います。反省点としては、団体さんから協働の中でのそれぞれの役割分担が難しかったと伺ったので、次回からはそのあたりもしっかり支援していくようにしたいと思います。

株式会社キロク長門営業所

経験値の浅い私たちでも「子どもまんなか防災ネットワーク」と手を取り合ってやっていくことで、子どもたちに実のあるイベントを作ることが出来ました。皆さんとのつながりも出来ましたし、リピートしたくなる気持ちも芽生えました。また、私たち自身、今回たくさんのことを学ばせてもらいましたので、それらを今後の活動に活かしていくようにしたいです。今回の協働は、凸と凹のようにお互いができることが上手く噛み合っているなと感じました。時に3対7あるいは7対3になりながらお互いに譲りあって、頼ったり頼られたりしながら寄り添って進めていくことが協働を成功に導くコツなのではないかと思っています。



その後・・・

団体側も企業側も、ともに「また来年も協働で何かに取り組みたいね」と次の展開を模索されているそうです。

ムリのない協働で 課題解決を図る

NPO法人DreamShare × 株式会社レノファ山口



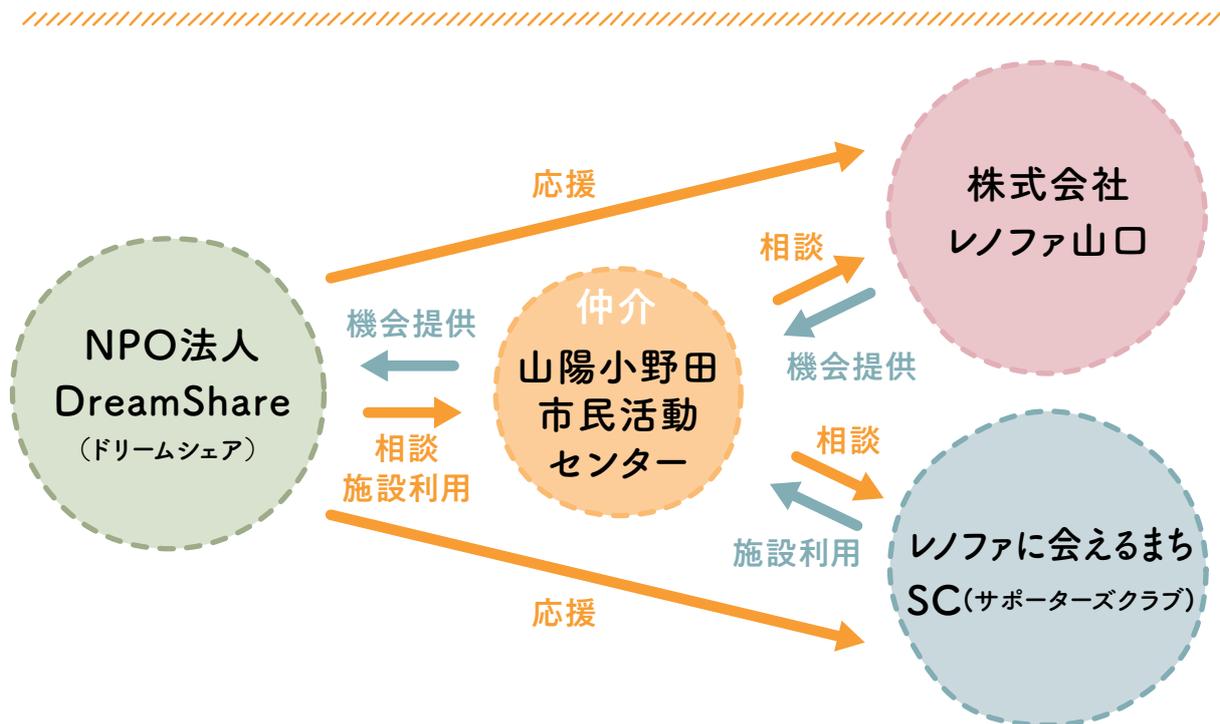
山陽小野田市民活動センター

2024年4月開設。開設一年目の現在は、地元の自治体関係者や諸団体、企業、自治会等との関係づくりに注力している。予約不要(無料)の交流ホール、作業スペースと、予約(有料)が必要な会議室を備える。山陽小野田市福祉センター、山陽小野田市公園通り出張所、山口銀行小野田支店西の浜出張所、小野田商工会議所、山陽小野田市地域職業相談室、山口東京理科大学学生寮、チャレンジショップ(897Cafe)が同じビル内に入居した特色を活かすべく、いつでも気軽に立ち寄り相談してもらえるセンターでありたいと、来訪者を温かく迎えるよう努めている。

登録団体:72団体(2025年3月現在)

協働の概要

発表の場の確保に苦勞している市民活動団体を、プロサッカーチームを運営する企業、そのサッカーチームを応援することでまちづくりに貢献する市民活動団体とつなぎ、協働を実践



NPO法人DreamShare (ドリームシェア)

2021年5月20日設立。未来ある子どもたちが健全に成長し自立心をもった人間になれるように、ダンス・ポカール・アートを3本柱に、プロの指導によるレッスンや本物に触れるワークショップなど多彩な研究所(LABO)活動を行っている。また、悩み迷う子どもたちや保護者の心に寄り添う支援をと、気軽になんでも相談できる相談所の開設・運営、子どもたちの職業体験、食育事業、自立支援、就労支援等も行っている。

株式会社レノファ山口

山口県に拠点を置くプロサッカーチーム「レノファ山口FC」の運営会社。レノファ山口FCが目指すのは、「心をつなぎ、感動を届けることで多くの皆様に夢・感動・元気を与えられるクラブ」。山口県下19の市町全部がホームタウンという、Jリーグ内でもめずらしいスタイルで運営されており、ホームゲームでは19市町の「ホームタウンデー」を設け、試合前に自治体と連携した活動を行うなど、地域との連携やまちづくりなどの社会貢献にも積極的に取り組んでいる。

レノファに会えるまちSC (サポーターズクラブ)

「みんなで何かを応援することで連帯や結束といった“つながり”が生まれる」をモットーに、パブリックビューイングなどレノファ山口FCへの応援活動を通じて、「レノファに会えるまち山陽小野田」を盛り上げていく活動を行っている。レノファ山口FCの魅力を発信し、これまで身近に“レノファ”を感じていなかった山陽小野田市民も熱狂の渦に巻き込みたいと意気込む。

きっかけ

2024年6月24日・9月21日

「さんようおのだ コミュニティ・ミートアップ」 イベントの開催

新たにオープンした市民活動支援センターの利用促進を図るため、市民へのオープン告知も兼ね、地元の市民活動団体が交流するイベントを開催。

つなぎでのヒント



山陽小野田
市民活動センター
センター長
青木 義一 さん

団体さん同士の交流はもちろんのこと、イベントきっかけに一般市民の方にもセンターに足を運んでいただいて、まずはうちのことを知っていただき、これから気軽に訪問したり利用したりするようになってほしい思いがありました。

春に活動を開始したばかりで、うちのセンターはまだ登録団体の活動状況や特性、抱えている問題などについての詳しい情報を持っていませんでした。そこで、イベントでのオープンな交流を通じて、参加されたさまざまな市民団体からそうした情報をヒアリングしたり、他団体との協働の可能性を探ったり、今後支援をしていく上で必要な信頼関係の構築を図っていきたくて考えていました。

困りごとの発見

2回のミートアップイベントを通じて、センターではそれぞれの団体が抱える課題を把握。そのうちの一つに、NPO法人Dream Shareが抱える「子どもたちが一生懸命ダンスを練習しても、それを披露する場が少ないのが残念」という課題があった。

つなぎでのヒント



Dream Shareさんはセンターの開館以来、センター会議室を利用して、ダンス(チア、コンテンポラリー)、体幹トレーニング、ヴォーカルレッスン、学習支援の活動をされています。週に3、4回ここに来られていて、その度にセンターに立ち寄ってセンターのスタッフと話をしていたかしていました。そうした日頃の雑談から得た情報も、今回の課題解決のための協働に役立ちました。

つなぎ先・つなぐ視点

Dream Shareの課題解決のために、同じ地域内で発表の場を提供できる団体との協働を模索した結果、2つの繋ぎ先候補が見つかる。

① 株式会社レノファ山口

Dream Shareさんの活動の一つに、チアダンスのチームがあることを知り、「チアといえば試合の応援」という発想から、「スポーツでまちづくりを推進したい」という企業理念を持ち地域貢献に取り組んでいるプロスポーツチーム「レノファ山口FC」と何か協働できないだろうかと考えました

山陽小野田市にはレノファ山口FCのトップチームの練習環境を整えた小野田市立サッカー交流公園「おのサンサッカーパーク」があり、センターはその指定管理を通じて(※1)株式会社レノファ山口とつながりがありました。

※1 おのサンサッカーパーク(山陽小野田市立サッカー交流公園)の管理運営業務は2023年4月からレノファ・アクティオ共同体が行っている。代表企業は株式会社レノファ山口。アクティオ株式会社(山陽小野田市民活動センターの指定管理者)は構成企業として施設の運営管理を行う。

② レノファに会えるまちSC(サポーターズクラブ)

「レノファに会えるまちSC」さんは、山陽小野田市民向けのレノファ山口FCの試合のパブリックビューイングの会場にセンターの貸し会議室を利用されていました。

Dream Shareさんのダンスチームは、レノファ山口FCを応援するチアダンス。パブリックビューイング会場で、サッカーの試合の前に応援のチアダンスを踊ることは、発表の場として最適なのではないかと考えました。

つなぎでのヒント



山陽小野田
市民活動センター
乾 智 さん

協働への声かけ

1 センターは、NPO法人Dream Shareに株式会社レノファ山口とレノファに会えるまちSCさんとの協働の可能性について相談

快諾を得る

つながりてコメント



NPO法人
Dream Share
寶住 桂 さん

NPO 法人としてさまざまな活動をする中で、活動に理解を得られてないのかなと感じることも少なくなく、「独りよがりになってるのかな」「このまま活動を続けていく意味があるのだろうか」と悩んでいた時期にこのセンターができ、「話しにおいでよ」と誘われ、活動で訪れるたびに立ち寄っていました。そんな私の話を聞き、それを紐解いて「いやいやそれは一人でやらなくていいよ。私たちがちょっと手伝ってあげよう」とセンターのスタッフが言うてくださった。うれしかった。雑談のようなお話をしているうちにこんがらがっていた問題がばあっとほどけていったんです。

この町にはレノファ山口FCのファンが多いし、どこをみてもレノファカラーのオレンジがある。そんな市民に身近なスポーツチームなのに、そこを応援するチアダンスチームがこの町にはない。だったら私たちがレノファ山口を応援するチアダンスをこの町でする、勝手に応援するのだから構わないでしょ、というような私の妄想をセンターの方に聞いてもらっていました。



- 2 センターは「株式会社レノファ山口」に、「おのサンサッカーパーク」指定管理者を通じて、地元市民活動団体のチアダンスのチームに発表の場を提供するという形で協働ができないかを打診

快諾を得る

- 3 「レノファに会えるまちSC」に、パブリックビューイング会場でのチアダンスの披露をセンターから打診。

快諾を得る

つながりコメント

株式会社レノファ山口
内山 凌佑 さん

県内における私たちの強みは、情報の発信力や集客力の多さだと思っています。そういった強みを地域の方々に還元していくということもクラブとして大切なことだと考えていますので、お申し出に協力させていただくこととしました。

ありがたいことに、私たちもいろいろなところから連携のお声がけをいただくのですが、その全てにお応えするのは難しい。サッカーパークの指定管理で連携しているところからのご相談だったというのが、今回のお話を受けるにあたって大きかったかなと思います

協働のステップ

株式会社レノファ山口と
協働内容についての話し合い

協働先にあまり負担をかけないようにするため、レノファ山口との交渉の窓口は、センターに1本化。
二者間で具体的な協働内容を話し合った結果、10月13日に「おのサンサッカーパーク」で開催されるレノファ山口FCとファンや地域住民との交流イベント「オータムフェス2024」で、Dream Shareがチアダンスを披露する場をセッティングすることが決定。

2024年10月1日

ワークショップの実施

「Dream Share」と「レノファに会えるまちSC」との協働に向け、まずはそれぞれの団体が抱える課題と提供できる資源とを整理するため、外部からワークショップの専門家を招いて意見交換会を開催することにしました。双方に話し合いへの参加を双方に呼びかけ、ワークショップでの意見交換を経て、「レノファに会えるまちSC」とは、

- ▶ 10月6日にセンターの貸し会議室で開催されるレノファ山口FCの試合のパブリックビューイング会場で、試合前にDream Shareがチアダンスを披露する形での協働が決定。

2024年10月6日

市民活動支援センター会議室のパブリックビューイング会場の観覧者の前で、Dream Shareのダンスチームの子どもたちが応援のチアダンスを披露。

つながりでのヒント



協働を受けていただいたのはJリーグの開催期間中であり、レノファ山口さん側は本業で非常に忙しい時期にありました。そんな中、協働に向けての話し合いの場に参加いただくことは難しいと考えました。多忙な相手先に協働であまり負担をかけたくないという思いもあったので、サッカーパークの指定管理業務の関係でレノファさんと接触する機会を利用して、具体的にどんな協働が実現可能かを話し合ったり実現に向けての調整をしていくこととしました。

つながりコメント



今回の連携は、こちら側が何か特別に準備するというわけではなく、私たちの場所をご活用いたたく、という認識でおります。実際必要だったのは、通常と変わらない多少の社内調整と当日の動きや時間割などの細かい内容の調整をセンターさんで行うだけだったので、負担はほとんどありませんでした。

つながりでのヒント



山陽小野田市に「Dream Share」というレノファを応援するチアダンスチームがあるということを知っている市民はまだ少なかったため、まずは山陽小野田市のレノファファンの方々にその存在を知ってもらえ良かったです。

つながりコメント



レノファ山口さんの「オータムフェス」という大舞台の前に協働で実現したこの場で、練習してきたチアを観客の目の前で披露し、皆さんから拍手をいただけたことは子どもたちが本番に向けての心構えをつくる上でとても良い経験になりました。

ここでのチアダンスの披露は、チームの子どもたちが何かしら夢に近づくための一歩にしたかったし、レノファを応援して試合に勝ってほしいと思う気持ちが子どもたちが自分を奮い立たせる力になってくれたらいいな、と考えていました。そんな私たちの思いもセンターさんには話していました。

ワークショップで
双方の資源と問題
を棚卸し

2024年10月13日

「おのさんサッカーパーク」で開催された「オータムフェス」で、Dream Shareのダンスチームがレノファ・カラーのオレンジのポンポンを持ち応援のチアダンスを披露



つながりコメント



社会連携活動においては、私たちは課題を解決するために「使われる側」であるというスタンスを大事にしています。今回私たちの「場」を使っていただくことで課題が解決し、また活動に参加した子どもさんたちにも喜んでいただけたのなら、協働した価値はあったと思いますし、素直に嬉しいなと思います。

「チア」には、人を応援するとか、人を元気づけるという定義があるんです。

私たちは、チアダンスでこの町の人たちも元気になってほしいという思いも込めて踊っています。

協働を終えて・・・

NPO法人Dream Share

今までの活動の経験から、団体が企業に直接働きかけるのは非常に難しいということは知っていました。今回は市民活動支援センターさんに間に入っていたので、私たち単独では叶わなかったであろうレノファ山口さんとの協働が実現しました。お願いしたわけでもないのに、私の話に耳を傾け、その思いを汲み、背中を押して協働へと促し、子どもたちの将来の糧になるであろう「レノファ山口FCの舞台で発表する」という活動のサポートをくださったセンターさんには本当に感謝しかありません。協働が決まって、子どもたちはレノファ山口のサッカー場でチアをすることをとても楽しみにしていました。チアの後には緑日でレノファの選手たちのお手伝いもできたので、自分たちが今回何かレノファの役に立ったと感じられてとても喜んでいるようでした。センターさんへの恩返し気持も込めて、今後より一層活動を充実させていきたいと思っています。また新たな協働が生まれることが楽しみです。センターさんには、変わらずそのサポートをお願いできたらと思っています。



その後・・・

今回のフェス終了後も、団体からは引き続きレノファの応援をしていきたいという声があがっていました。

株式会社レノファ山口

私たちプロスポーツチームは、ファンやサポーター、パートナー企業さんなどに支えていただけて成り立っていますので、所属するJリーグの理念にも掲げられている通り、私たちには地域社会への貢献とか地域と連携した事業を行っていくという使命があると考えています。ありがたいことに、多くの県民の皆様は私たちの名前をご存知だと思いますが、まだまだ私たちのホームゲームを観に来られている方は少ないので、今回のようにダンスチームの舞台をきっかけになど、サッカーとは違った切り口でレノファ山口FCにふれる方や来場される方がいらっしゃれば、それはクラブとしてもありがたいことだと思っています。

山陽小野田市民活動センター

レノファ山口FCさんとは、「おのさんサッカーパーク」の指定管理を通じてつながりがあり、レノファ山口FCさんの「地元に使ってもらう立場」という企業方針を伺っていたので、市民活動センター開設一年目の今年、何か一緒に地元根ざしたものができないだろうかと考えていました。センターが間に入ってうちの登録団体さんとうまくつなげば、両方がWin-Winの形で出来るのではないかと。

今回、DreamShareさんとお会いする機会があって、こんなことをやりたいというお話を伺って、前々からやりたかった地元との協働の話を進めさせてもらって、とてもいい形で実現できた。イベント現場でチアを踊っている子どもたちの笑顔を見て、「ああ、みんな頑張ったんだね。これが実現できて良かった」と本当に嬉しかったです。

でも、これで終わりではない。こういうことの積み重ねが大事なのだ思います。これからもいろんな市民活動団体さんを応援していきたいし、レノファ山口FCさんともまたいろいろなことをやっていきたい。センターは「つなぎ役」です。場所も提供するし、何かあったら相談にも乗る。皆さんに使っていただけて、山陽小野田をいいまちにするお手伝いをしたいと思っています。

ビジネスと社会貢献が両立する協働の仕組み「支え人。」

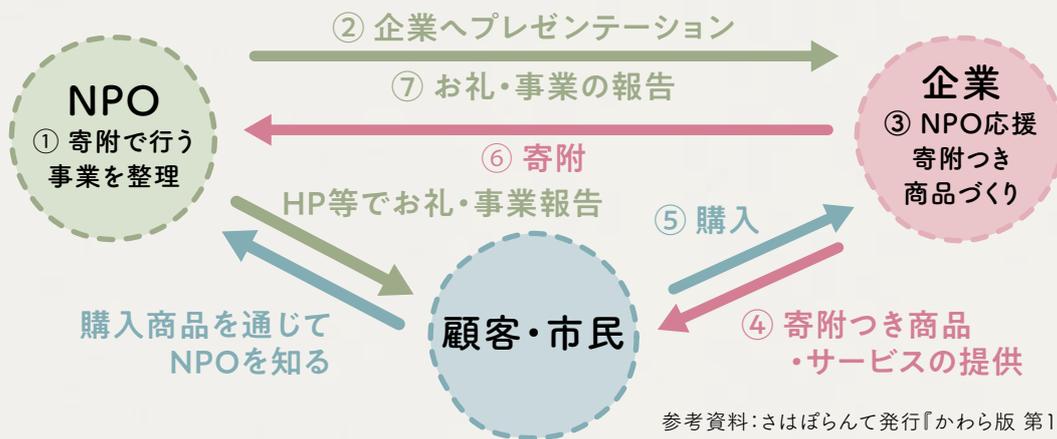
10年ほど前に始まった「支え人。」という協働のプロジェクトがあります。今も続くこの協働の仕組みを創ったのは、山口市市民活動支援センター「さぼらんて」。このコラムでは、「支え人。」の概要、仕組みづくりを始めたきっかけや成果、長続きの理由などについて紹介しています。協働の仕組みを創る際の参考になさってください。

「支え人。」とは

「寄付つき商品」というカタチで、社会を支えるNPOを企業と消費者が支える協働の仕組みです。2013年に「さぼらんて」が、企業×NPOのつながりから地域全体を巻き込んだ公共を支える新たな協働の仕組みとして創りました。この仕組みの中では、参加する企業も、NPOも、消費者も、互いの「支え人」であることから、この名がつけられました。



企業×NPO×私たち “買う”社会貢献プロジェクト「支え人。」 支える、しくみ



参考資料：さはぼらんて発行『かわら版 第1号』

寄付つき商品とは

企業とNPOなどの団体がパートナーシップを組み、社会課題解決のために企業のマーケティングを活用するという仕組みのことです。製品の売上に応じて企業がNPO等に寄附を行い、その際に「製品が『寄附こみ』であること、その製品を買うことによって消費者は社会課題の解決に貢献できる」ことをPRし、製品のマーケティングの一環として活用する、という手法です。企業には販売促進に加え社会貢献をする企業としての評判が獲得できるというメリットがあり、NPOには活動資金が獲得できると同時に自分たちの活動をPRできるというメリットがあります。



「支え人。」のプロジェクトに参加することで得られるメリット

企業のメリット

- ・「社会貢献を行う企業」としての評判が得られる
- ・地域になくてもならない企業のイメージが広がる
- ・寄付つき商品は「売れやすい」「購買リピート率が高い」傾向がある
- ・寄付つき商品として差別化することで販促、新規顧客の開拓につながる
- ・売れば売れるほど地域課題の解決につながる
- ・独自に社会貢献プログラムを開発する手間がかからない
- ・顧客と社会をよくするパートナーとしてのつながりが持てるようになる

NPOのメリット

- ・活動資金が得られる
- ・自分たちの活動をより広く世の中に伝えられる

消費者のメリット

- ・寄付つき商品を購入することで地域課題の解決に貢献できる。

教えて!「さぼらんで」さん 「支え人。」Q&A

Q 始められたきっかけは?

NPOの財源確保や安定運営のためのマネジメント支援を行う中で、少なくないNPOが抱えていた資金不足という課題を、NPOと企業とをマッチングした「寄附つき商品」という形で解決できないかと、当時山口県共同募金会で「募金百貨店」のプロジェクトを手掛けておられた久津摩和弘さん(※1)に相談したのがはじまりです。

※1 赤い羽根CRM企画「募金百貨店プロジェクト」創設者。2018年6月～日本ファンドレイジング協会理事。

Q それが2013年?

ちょうど認定NPO法人の制度がスタートした時期で、寄附文化の醸成をしていきたいという思いもありました。そこで、山口県のプロポーザルに参加して寄附文化醸成事業を受託し、補助金をいただいてこの協働のプロジェクトをスタートしました。

Q 「支え人。」のプロジェクトの進め方は?

まず、企業を招いてプロジェクトの説明会を開き、そこでNPOに活動のプレゼンをしていただきました。そして、説明会に参加された企業にヒアリングを行って、企業とNPO法人とをマッチングしました。

進め方

- ① 企業説明会の開催
- ② NPOのプレゼンテーション
- ③ 企業とNPO法人のマッチング
- ④ 寄附つき商品の開発
- ⑤ 販促活動
- ⑥ 寄附金の贈呈式・NPOの報告

Q 参加者はどうやって集めたの?

企業は、商工会などを通して、寄附に興味があるという企業をお手上げ方式で募集し、来ていただきました。一方、NPOの方は事前にさぼらんででプロジェクトへの参加条件を設定し、その条件をクリアした団体に参加していただくようにしました。

Q NPOに選定基準を設けたのはなぜ?

企業からお金をいただくこととなりますので、どんな団体でもOKには出来ないと考えたのです。そこで「法人格をもっていること」「会計処理・報告が適切にできること」「寄附を集めるという意識が団体にきちんとあること」という条件で参加していただけるNPO法人を選出しました。スタート時に数を増やしすぎるとプロジェクトの管理が難しくなるという懸念があったのもNPOの数を絞った理由の一つです。

Q なぜ企業とNPOをマッチング?

「支え人。」の協働の仕組みは、「この活動を応援したいから寄附する」という「目的ありき」の寄附としていることが特徴です。ですので、プロジェクトに参加したいという企業には「どこに寄附をしたいか」「どういう形で寄附をしたいか」「どういう思いを持って参加したか」といったことを細かくヒアリングし、目的の合うNPOとマッチングする必要がありました。

Q マッチングの次は何を?

「寄附つき商品」の開発です。この協働のプロジェクトで一番手間と時間がかかり、また一番苦労するところでもあります。

教えて!「さぼらんて」さん 「支え人。」Q&A

Q なぜ開発が必要で それに手間がかかるの?

寄附つき商品を買う消費者が寄附の理由に納得できないと購入につながらない。結果、寄附が集まらないことになるからです。

そこで、さぼらんてとコンサルをお願いしていた久津摩さん、マッチングしたNPO法人と企業とで、まず「何を寄附つき商品にするのか」ということをものすごく時間をかけて整理していきました。何度も何度も会議を重ね、企業理念とNPOの理念がつながるストーリーを見つけ、消費者の共感が得られるストーリーを開発していきました。本当に寄附つき商品のアイデアが出ては消え、出ては消え、みたいな感じで。ものすごい数の会議を重ね、最終的に残ったものが「寄附つき商品」として売り出されることになりました。

Q 開発時に心がけたことは?

新規で商品企画とすると企業側の負担やリスクが大きくなるので、なるべく既存の商品やサービスを活用して作る。また、寄附額は1~10%程度と少額にして、その代わり長続きするようにするということが心がけました。

Q 寄附つき商品はNPOと 企業の組み合わせごとに 違う?

はい。

企業ごとに寄附の目的はそれぞれ違うので。企業×NPOそれぞれのマッチングごとに開発をしていきました。

Q どんな寄附つき商品 があるの?

例えば、山口おやこ劇場として発足した認定NPO法人こどもステーション山口さんと、木のおもちゃ専門店のリンドヴルムさんのマッチングでは、「ぬくもりプロジェクト」という寄附つき商品を開発しました。

木のおもちゃのぬくもりは五感を刺激し、作りがシンプルな分遊び方のバリエーションが豊富で子どもの遊びを育てると言われています。また、生の観劇も子どもの五感を刺激し、豊かな感性とイメージネーションを育みます。そして、どちらもその時間を親子で共有することを大事にしている点が、こどもステーション山口さんとリンドヴルムさんの共通点。「ぬくもりプロジェクト」に込められた共感のストーリーです。リンドヴルムさんには、「子どもたちに本当に大切なものを伝える活動を応援します!」と、プロジェクト参加以来9年間ずっと寄附していただいています。

平成6年度に実施された「支え人。」のプロジェクト

認定NPO法人
こどもステーション山口

× (株)メルシー「おかげさまプロジェクト」 10年目

※対象商品1個につき1円寄附

× リンドヴルム「ぬくもりプロジェクト」 9年目

※積み木の売上の5%、
こどもステーション山口の例会での販売品の5%を寄附

× POLAsweet 「とっておきの時間プロジェクト」 5年目

※エステのボディコースの売上の0.5%を寄附

NPO法人あっと

× (株)モリイケ「楽しい子育て応援文具」 10年目

※対象商品の売上の1~3%を寄附

教えて!「さぼらんて」さん
「支え人。」Q&AQ 10年経った
プロジェクトの成果は?

10年間の寄附総額は、1,755,699円です。2013年のスタート時は3法人6社で始まりましたが、その後NPO法人が1つ解散して現在は2法人4社のプロジェクトになっています。この10年の間、企業がプロジェクトから撤退されたこともありましたが、いずれも続けたくても閉店などやむを得ない事情によるもので、「もう応援できません」というマイナスな理由ではありませんでした。つまり、それは企業側もこのプロジェクトでの寄附にメリットを感じておられるからではないかと思っています。

Q なぜ10年も続けて
こられたの?

まず第一は、企業とNPO法人との相性の良さかな、と思います。企業とNPOのマッチングを初期段階でしっかりファシリテートしたことが大きかった。またさぼらんての伴走がなくなった後は、企業とNPOが贈呈式などの定期的なイベントを通じて直接やりとりをして、担当者が変わってもプロジェクトの話を進められるような良好な関係を維持されていることも大きいと思います。

企業とNPO双方にメリットがあるWin-Winの形での協働、両者とも無理のない形での協働としたこと、消費者も参加できる開かれた仕組みとして評価されていること、なども長続きの要因になっていると思います。

Q さぼらんてさんの
伴走が途中でなくなる?

ヒアリングやマッチング、寄附つき商品の開発など、プロジェクトの立ち上げ当初は深く関わりファシリテートしていきますが、その後はしばらく伴走して離れます。立ち位置としては、あくまでサポート。だから、途中から離れる前提で最初に企業とNPOをマッチングしています。ちなみに寄附金もさぼらんてを経由せず、企業とNPOで直接やり取りをしていただいています。また、寄附金は必ず年に1回贈呈式をやって企業からNPOに直接渡していただき、NPOからは御礼の言葉を伝えていただくようにしています。その贈呈式には毎年さぼらんてもお邪魔していて、プロジェクトの経過などについて何って、webや会報で「支え人。」についての情報発信をしています。

Q ずっとファシリテート
しなくてはいけないという
仕組みにはしていない?

はい。

立ち上げ当初は丁寧に完璧に近い形でファシリテートして、あとはマッチングした企業とNPOとで自走していただく形、それで協働が続いていく仕組みになっています。

Q 課題は?

企業とNPOの結びつきが強い分、寄附先が解散などでなくなってしまうと次の寄附先へとなかなかつなげにくいという課題があります。

また、「支え人。」の協働の仕組みを作って以来、ありがたいことにこの10年ずっと活用されてきているのですが、最初のマッチング以降は諸事情あって残念ながら説明会と新たなマッチングを行っていません。それが課題といえば課題です。もっとこの仕組みを活用していけるよう努めなければと思っています。

団体の今後を見据え 寄り添った伴走支援

榎野川再発見ウォークの会 × 山口芸術短期大学 × 株式会社伊藤園山口支店

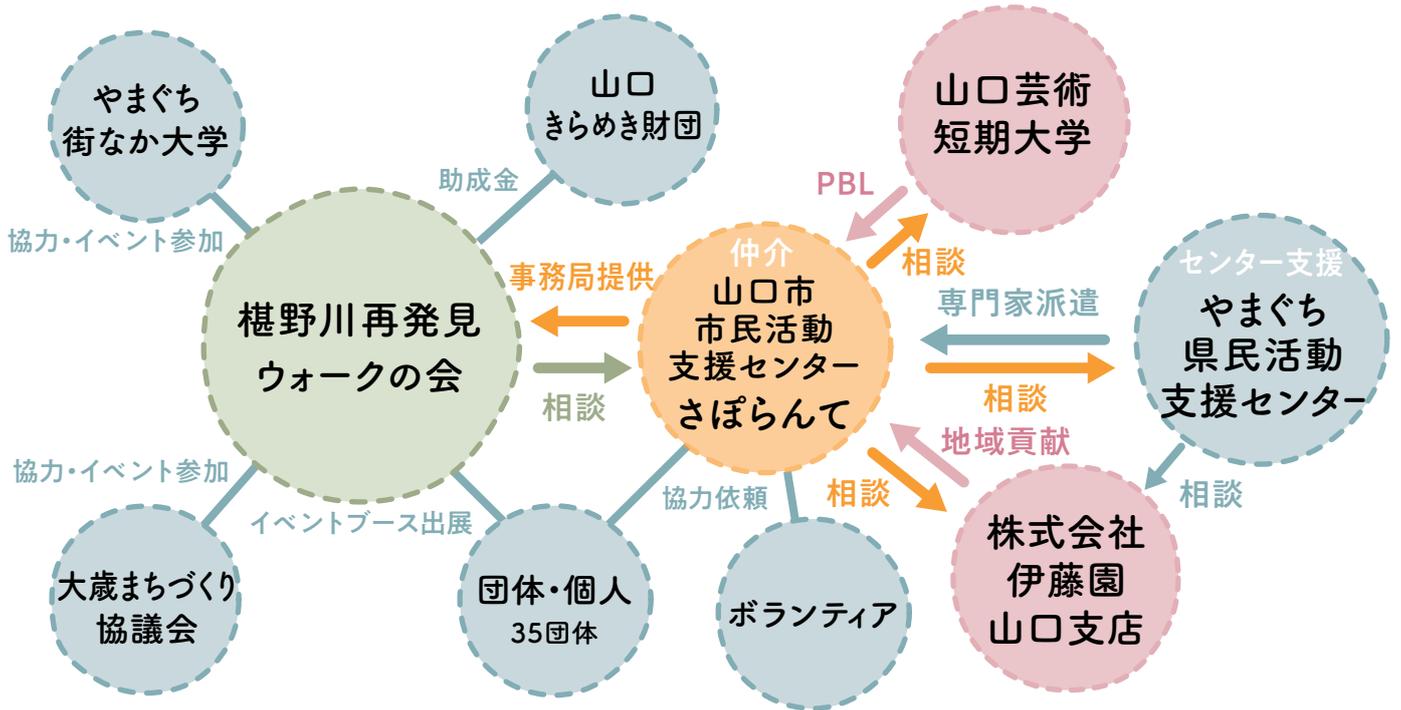


山口市市民活動支援センター「さぼらんて」

「さぼらんては、みんなのために活動している団体やこれから何かをはじめたいと思っている人をサポートします」。県内で最初に開設された市民活動支援センター。市民活動団体(NPO)の活動支援をはじめ、まちづくりや市民活動、ボランティアへの参加のきっかけづくり、市民活動団体と行政・地域・企業などの橋渡し役などさまざまな実践に取り組んでいる。山口市内の団体だけでなく、全県を対象とした団体も多数登録しており、県内初の先進的な取り組みや課題解決のための仕組みづくりをオリジナルで考案することも少なくなく、他の市民活動支援センターの目標モデル的な存在にもなっている。

協働の概要

市民活動団体、短期大学、市民活動支援センター、企業が協働し、地域や各種団体の協力を得て、人や文化など豊富な地元の地域資源を掘り起こし、地域課題を見つけ、つながるためのイベントを開催した。



榎野川再発見ウォークの会

榎野川沿いの県道501号線(通称:健康ロード)周辺の人、文化、自然等の地域資源を掘り起こし、それらをつなぐことを目的とした交流および健康増進のための場づくりを行うために2024年に設立された市民活動団体。「健康ロードを活用した健康増進につながる活動」「SDGsの推進を図る活動」「市民や地域諸団体との交流および連携する活動」を行うこととしている。

山口芸術短期大学

芸術表現学科と保育学科を設置した山口県内唯一の芸術系短大。建学の精神「至誠」に基づき、芸術によって生まれた豊かな感性と創造力を育成している。また、地域とともに歩み、互いに影響し合って成長・発展していく短期大学でありたいという方針で、より広い視野と社会性を備えた社会人を育てるため、選択科目「地域課題解決演習(PBL)」や授業以外のボランティア活動などを通して地域との関わりを深めるよう促している。

株式会社伊藤園 山口支店

1964年創業の清涼飲料水等の販売業者。地域貢献に資する活動や地域づくり活動に積極的で、社会貢献の指針は「山口を元気に! 地域社会・コミュニティとのつながりの深化を目指して」。環境保全活動への寄付や山口市の榎野川河口干潟の再生活動、山口湾カブトガニ幼生生育状況調査活動、クロツラヘラサギ保全のための海岸清掃活動などにより、平成5年度に山口県等から「企業ボランティア活動促進モデル事業所」の指定を受ける。

きっかけ

2023年冬

「榎野川再発見ウォークの会」が さぼらんにてに相談に行く

「榎野川再発見ウォークの会」の発起人が「さぼらんにて」を訪れる。

つながりてコメント



榎野川再発見
ウォークの会
発起人

竹田 悦子さん

コロナ禍に「健康ロード」と呼ばれている県道501号線にウォーキングに行き、榎野川沿いのこの場所の素晴らしさに感銘を受けました。しかし、魅力ある地域資源にもかかわらず認知度は低く、地元住民にさえ有効活用されていない。この地域資源を広くPRし、有効活用できるようなイベントを開催したいと思い仲間を集めたのですが、具体的にどう進めていったらいいか悩んでいました。

困りごとの発見

相談内容から、県道501号沿い榎野川の河川敷を使ってイベントをしたいが、その進め方と財源の確保について困っていることが判明。

つながりてのヒント



さぼらんにて
副センター長

小田 亜貫さん

県道501号の魅力をもっと多くの人に知ってもらうためにウォーキングイベントを企画していること、地域・人・資源の掘り起こしにつながり、できれば一過性ではなく永続的で地域で育てていけるものにしたいという思いを抱いていらっしゃるのことがわかりました。

想定されていたのは約3kmという広いエリアを使ったものだったので、一団体での開催運営は難しいと考え、実行委員会として一緒にイベントを作り運営している協働先を募ることを提案しました。

つながり先・つなぐ視点

「さぼらんにて」では、困りごと解決のために目的に沿った形で協働できそうな団体の情報を「榎野川再発見ウォークの会」に提供。

① やまぐちきらめき財団

財源については、うちで把握している助成金情報の中から、「公益財団法人やまぐちきらめき財団」の助成金(※)を紹介し、申請するよう助言しました。

※県民活動への理解促進と参加促進を図るため、県民活動団体が他の団体等と協働して開催するイベントを支援する助成金

③ NPO法人やまぐち県民ネット21

イベント運営のために、「榎野川再発見ウォークの会」ではボランティアの募集を想定されていました。加えて想定されていたイベントの開催エリアが広範囲で、数多くのボランティアが必要と想定できたので、ボランティアの募集や運営についての助言・支援を専門家からいただけたらいいなと考えました。

② 山口芸術短期大学

イベントの開催目的から学生との協働が望ましいのでは、と考えました。

さぼらんにてには、「学生PBL」をサポートする形で山口芸術短期大学さんとの繋がりがありました。PBLとは、大学が取り組むプロジェクトベースのラーニングで、高校で行う探求学習のようなものです。大学側がその活動のフィールドを探されていたので、「デザインや表現など学生の専門性を活かせる地域貢献」という視点で関わっていただく場を用意しました。

④ 株式会社伊藤園

「榎野川再発見ウォークの会」では地元企業からの参画も検討されていましたが、会が声がけた先とは折り合いがつかず実現に至りませんでした。会のメンバーのもっていた情報と「やまぐち県民ネット21」さんの人脈から、水環境の保全に社会貢献の実績のある株式会社伊藤園山口支店さんを候補にしたいと考えました。(後述)

協働への声かけ

「さぼらんにて」では「榎野川再発見ウォークの会」に提案した助成金および各団体との連携希望を確認。承諾を得た上で、各団体へ協働の打診を行う。

① やまぐちきらめき財団

「交流・健康増進」の企画で「榎野川再発見ウォークの会」として助成金に応募

つながりてのヒント



「県民活動リレーイベント」の枠で採択される同財団と共催という形で事業を企画・実施していく形での採択となり、以降財団も協議などの場に適宜参画することに。

② 山口芸術短期大学

「さぼらんで」からPBLで繋がりがあった教授を通じて学生の参画を打診

快諾を得る

つなぎでのヒント



さぼらんで
副センター長
小田 亜貫さん

「こんな市民活動団体主催のイベントがあるのですが、学生さんのPBLにどうですか」と相談に行ったら、先生がすごく興味を持ってくださって。「既にあるものじゃなくて1から始める作るイベントなら、学生の意見を反映する余地があるからぜひやらせて欲しい」ということになり、イベント企画に特に関心のある学生を集めてもらいました。

③ NPO法人やまぐち県民ネット21

「さぼらんで」からボランティア運営についての助言・支援を依頼

快諾を得る

専門家によるボランティアリーダーのための講座を開いてもらうこととなる(後述)

④ 株式会社伊藤園

つながりのあった「やまぐち県民ネット21」から協働の打診。

一旦保留となるが、その後事業趣旨を説明することで協働を承諾(後述)

もともと地域貢献に興味を持つ企業さんですし、会のメンバーが以前環境関連のイベントに協賛してもらったという情報も持っていました。どう繋げようかと考えていた時、「やまぐち県民ネット21」さんが関係をもってらっしゃって。協働の声掛けには、やはり情報を持つことと人脈を築いておくことが大切ですね。

つなぎでのヒント



⑤ さぼらんで

「榎野川再発見ウォークの会」の立ち上げメンバーは3人だけで、事務局の機能を担う人材が不足していました。さぼらんででは支援の一貫として、今回は主に事務局的な立場でこの事業に協働参画していくこととしました。

⑥ 大歳まちづくり協議会、
防災危機管理協会、
包括支援センター、
ほか多数

さぼらんでからの声かけ以外に、「榎野川再発見ウォークの会」ではメンバーの人脈を通じてイベント運営や出展へ協働募集の声かけをされ、結果的に地域も含め35団体が参加するイベントを開催できることになりました。

協働のステップ

Step 1 さぼらんでによるファシリテート
事業の方向性を定める

助成金の採択が決まり、「榎野川再発見ウォークの会」で中心となって事業を担うコアメンバーがさぼらんでに改めて相談に訪れる。さぼらんで側では、事業の立ち上げ支援にあたり、まずはそのメンバー間の意思統一が何よりも必要と考え、丁寧にヒアリングしながらのファシリテートを実施した。

つなぎでのヒント



相談にこられた中心メンバーがどれくらい近い思いでおられるのか分からなかったため、その点を整理することから始めました。それぞれに事業に対する想いはあるでしょうが、互いにそれを吐き出して共有しないと事業の方向性を定めることができませんので。

「ウォークがメイン?榎野川がメイン?それとも、それ以外の何か?」とか、「イベントがやりたいのか」「目的はイベント開催でなく、イベントを通して何か考えたいのか?」「ただ歩くだけでいいのか?」「自然がきれいならばどこでもよいのか?」「どうしても榎野川でなくてはダメなのか?それはなぜなのか?」etc..。そういった細かいことを1問1答形式で整理して行って、何をやりたいのかを一緒に考えていきました。

Step2 さぼらんてによるファシリテート 事業内容の整理

最初にさぼらんてが受けた相談は「榎野川の地域資源としての魅力をPRできるようなイベントをしたい」だったが・・・。



中心メンバーの思いを整理した結果、概ね方向性は以下のような点に絞られてきました。

- 地域資源は人や文化も含め榎野川沿いにいろいろ点在しているけど繋がっていないのもったいない。一気に集まってそれが繋がるようなことをしたら、地域の課題も見えてくるだろうし、自分たちが思ってもみなかった課題も出てくるだろう。
- 今困っている人たちの声とかも集めたいし、情報も聞きたい。
- 自分たちが知らない地域資源とかがあれば知りたいし、それも繋げたい。
- 参加する人によって何を発見するかは変わるけど、イベントを通じて何かを発見してもらおう。そういう「再発見」という意義をいれたい。
- 単なるイベントの開催ではなく、これを一つのチームモデルとして実装していきたい。
- ここでやったことが、そのやり方がよその地域に広がっていくようにしたい。
- こうしたらいいよね、ということが、後から参加した人たちも言い出しやすく、みんなで育てていくようなイベントにしたい。
- イベントを自分たちだけのものにするのではなくて地域で根付くようにしたいから、メインターゲットはそこに住んでいる人たちにしたい。
- 榎野川の美しい環境を守るためにも、SDGsに配慮した形で運営する。

Step3 さぼらんてによるファシリテート 思いの共有とイベント開催に 向けての活動スタート

ファシリテートの結果、会が開催しようとしているのは「榎野川はもとより人や文化など点在する豊富な地域資源を掘り起こしつつ、地域課題を見つけてつながるためのイベント」であることが判明。主体団体の思いが共有され、事業の方向性が明確に決まったことで、具体的なイベント内容の企画、協力者への声掛けが始まる。

つながりへのヒント



さぼらんて
副センター長
小田 亜貫さん

最初にどういうイベントにしたいかということを中心に整理したので、あとは参加者で何をやるかとかどんなブースがあるかといった具体的な内容を企画していくだけ。内容がイベントの趣旨にそっているか否かを判断して企画していけばいいだけなので、企画を立てやすかったと思います。また、そうして企画されたイベントは、参加する人にも趣旨が伝わりやすいと思います。

企画を立てることと並行して、イベント開催に協力が必要な地元の自治会や団体にも会のメンバーの人脈を通じてどんどん声がけされていきました。声をかける先は誰でもいいというわけではなく、「きちんとイベントの趣旨に添った形で連携してもらえる人」と選定基準がはっきりしていたので、出展決定に文句が出ることもなく、お願いもしやすかったのではないかと思います。

Step4 さぼらんてによるファシリテート 協働の開始・関係機関への連絡

- ① さぼらんてから山口芸術短期大学へ協働の提案。14名の学生が運営側に参画することになる。
- ② イベント開催に必要な、河川敷を管理する市と県道を管理する県と警察への届出と必要書類の提出、必要事項の確認と相談、地域への説明などを「榎野川再発見ウォークの会」のメンバーが行った。



山口芸術短期大学でのPBL実行委員会

Step5 さぼらんてによるファシリテート 話し合いと情報共有の場の設置

① 情報共有のための googleドライブの設置

「榎野川再発見ウォークの会」と協働する各団体関係者、山口芸術短期大学の学生が、相互に質疑応答や連絡相談でき、情報共有が図れるようgoogleドライブを設置した。

会のメンバーは本業が多忙、大学生も授業の一貫として携わるため協働にさける時間には制限がある。大学生と団体メンバーの双方が時間がない中、いつでも都合のよい時にイベント準備に関する連絡や情報共有ができるように、本事業専用のgoogleドライブをさぼらんてで設定し、活用していただくこととしました。

② 話し合いの場とワークショップの開催

「榎野川再発見ウォークの会」と学生でイベントのカテゴリごとの担当を決め、準備を進めることとなるが、会のメンバーと学生とが直接会って話す機会がなかったため、さぼらんてが双方に働きかけて直接打ち合わせする場を複数回設ける。



山口芸術短期大学生と榎野川再発見ウォークの会の会員のワークショップの様子

③ 株式会社伊藤園山口支店の担当者に再度協働の打診

会のメンバーと大学生とが直接コミュニケーションをとりながら事業を進めていく機会がなかったため、改めて両者が直接会ってイベント実施にむけて打ち合わせをする機会を設けることにしました。

今回、大学生にはPBL授業の一環として協働に参加してもらっていましたが、ボランティアというより、スタッフとして参加する色合いも強かったため、その心構えを持ってもらい大人との打ち合わせや交流を円滑に進めるためのファシリテーションが必要と考えました。

そこで、両者の話し合いの場のうち2回を使って「やまぐち県民ネット21」のファシリテーターが進行して、イベントの趣旨や意思の共有、ボランティア理論などについて大学生と会メンバーが学ぶワークショップ（※1ボランティア研修会として後述）を行うこととしました。

協働を希望していた株式会社伊藤園山口支店の担当者さんとその話し合いの場に招き、会のメンバーと学生とがイベント開催にむけての話し合いを行う場面に立ち会っていただくことで本事業の趣旨を理解していただき、その結果、協働に参画していただくことが決定しました。

「地元のきれいな水」を大切にするという企業姿勢を持つ株式会社伊藤園さんに対して、本事業には「地元資源の有効活用」「地元資源を掘り起こし、それを育み楽しむ住民主体の取組み」という事業趣旨があることを伝え、連携が得られるよう努めました。

Step6 さぼらんてによるファシリテートボランティア研修会（※1）の開催

さぼらんてからの声がかけて、学生と関係者向けのボランティア研修会を開催。「NPO法人やまぐち県民ネット21」に関連情報の提供を依頼し、ボランティアの受け入れやイベント運営について学ぶ機会を設けた。

学生さんと協働するのであれば、この協働から何かを学んでいってほしいという思いがありました。そこで、この機会を利用してボランティアコーディネートについて学んでいただき、イベント当日に協力してくれる高・大学生ボランティアのリーダーになってもらおうと考えました。

研修会で学んでもらったのは、「受け入れ時にどんなオリエンテーションをしたらいいのか」「どう声かけをしたら、ひとりひとりが主体的に動いてくれるか」「来場者に来て良かったと思ってもらうために、何を伝えたらいいか」「イベントの開催趣旨をわかりやすく伝えるのも大切」といったようないわゆるボランティアマネジメント。それぞれ担当の現場でボランティアリーダーとして採配するためのスキルを習得していただきました。

つながりのヒント



さぼらんて
副センター長
小田 亜貫さん

Step7 さぼらんてによるファシリテート各団体間の連絡調整と運営準備の支援

① 団体間の連絡調整

② 各種マネジメントツールの作成と外部向けの情報発信

事務局を務めていたさぼらんてでは、事業の進捗管理やボランティアマネジメントを行う上で有効となるツール（年間スケジュール、ボランティア参加の手引、受付簿など）を作成。今後の事業にも活用できるものとしてそれらを会に引き継ぐことに。併せて、イベントPRチラシの発送、SNSを活用した情報発信の段取りも行った。

③ 当日ボランティアの募集

イベント当日のボランティアを、さぼらんて、チラシ、ボランティアのマッチング情報サイト「あいかさねっと」で募集した。



開催時期も迫ってくる中、まずこちらで準備からイベント本番までにすべきことを想定して、会のメンバーや大学側と連絡・調整して、適宜打ち合わせの場をセッティングするようにしました。

つなぎでのヒント



さぼらんて
副センター長
小田 亜貫さん

2024年11月23日

「榎野川再発見ウォークの会」、山口芸術短期大学の学生ほか35の団体が協働するウォーキングイベント「501再発見!秋の榎野川ウォーク」開催。

矢原河川公園から井手ヶ原公園まで榎野川沿いの約3kmの区間で、榎野川健康ロードを使ったスタンプラリーをはじめ、裂き織りや防災工作などのワークショップ、音楽ライブ、ミニサッカーやヨガなどのアクティビティ、健康チェック、体力測定、手工芸品や焼き菓子、有機野菜の販売、キッチンカーなどの催し物を2つの河川公園で展開し、地元住民を中心に約500人の参加があった。

芸短生たちは事前に振り分けられた4つのチームに分かれ、ボランティアリーダーとしてそれぞれ担当するチームのボランティアを差配してイベント運営を支えてくれました。

株式会社伊藤園山口支店さんには、矢原河川公園と井手ヶ原公園にある給水所で参加者が持参したマイボトルに配るお茶を提供していただきました。

出展の各ブースは、イベントの趣旨であるSDGsの理念を守り環境に配慮した形で運営。地域資源の再発見、地元住民同士の交流の促進や地域課題の発見などに寄与してくれたと思います。



協働を終えて…

山口市市民活動支援センター「さぼらんて」

副センター長 小田 亜貫さん

今回の協働で一番時間をかけたのは、相談に来られた「榎野川再発見ウォークの会」の三人への最初のヒアリングです。それぞれの方の思いを全部吐き出さずにはいられず、時間をかかれました。協働を成功させるには、関わる人みんなが「目的を共有する」ということがとても大切だと考えます。その部分があいまいだと協働が上手くいかなかったり、協働を長く続くものとするのは難しいのではないかと思います。今回の案件でも協働に取りかかる前に、「何のためにそれをするのか」という部分を明確にすることに時間と手間をかけました。本人たちも明確に掴みきれていない潜在的な部分が浮かび上がってきて目的が明確になったことで、今回の協働も関わるすべての人に思いが共有され、成功へと導かれたのではないかと思います。



その後…

本イベントの運営は、団体の手を離れて開催地の地元コミュニティ組織に引き継がれ、来年度の開催も見込まれています。

若者・子どもと大人とまちをつなぐ

NPO法人文化遺産トラストほうふ × 日本史研究会(周南公立大学) × 山口県立防府商工高等学校

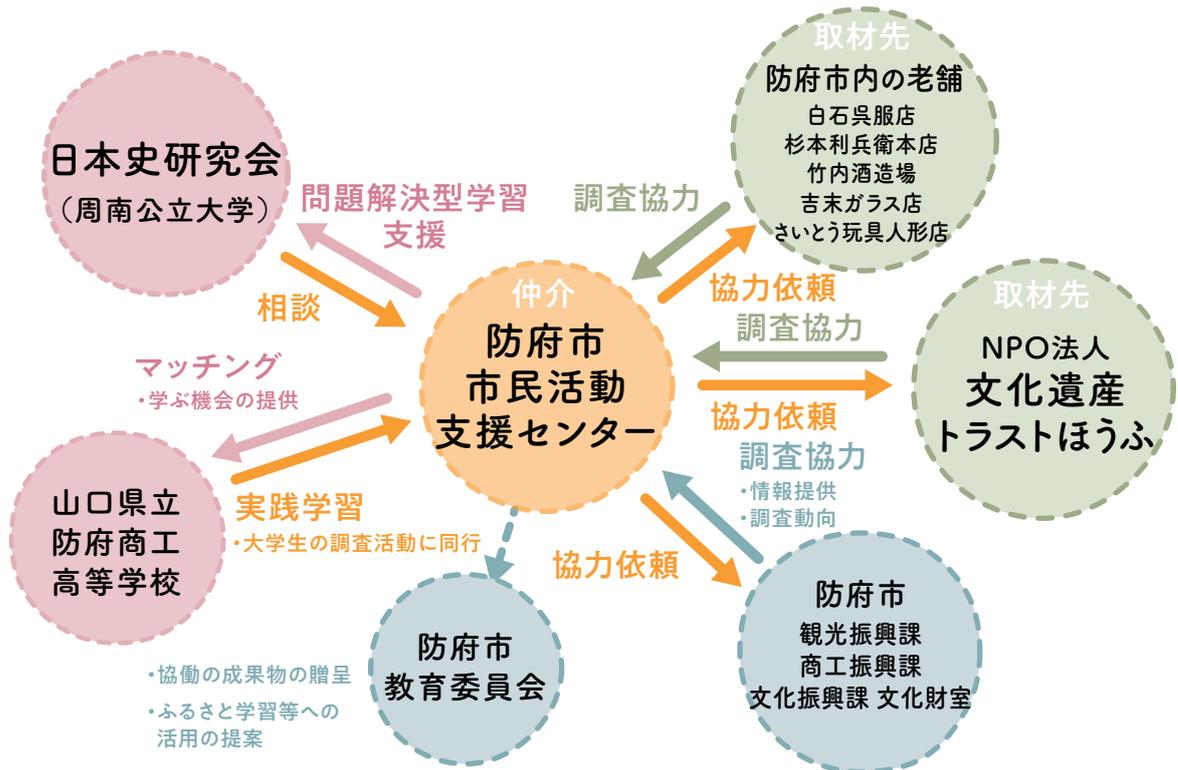


防府市市民活動支援センター

防府市における市民活動の促進支援および活性化を図るために、設置され、「自分たちの住むまちや社会をもっとよくしたい!そんな活動を応援します!!」をモットーに、利用される側も利用する側も、“お互いさま”の精神で、お互いに気持ち良く利用できるセンターを目指している。特色は、まちづくり、社会教育、子どもの健全育成、国際協力、高齢福祉など19分野・分類の207団体(2025年3月現在)という幅広い活動分野を網羅した登録団体があること。また、地域力をあげていくために自治会とも深くつながり、見つけた地域課題の解決のため登録の市民活動団体をつなげていく協働も手掛けていることも特色。

協働の概要

大学生が行う地域の商業の歴史に関する街なか調査の実践学習を、市民活動支援センターがつないだ地元の商店・企業、市民活動団体、行政が協働してサポートした。協働の場への高校生のマッチングも行い、高校生の実践学習の場とした。



NPO法人 文化遺産トラストほうふ

文化遺産の調査、保護、啓発活動を行い、学術・文化に寄与するとともに市民の文化的な生活向上をはかることを目的に設立された市民活動団体。主に、国の史跡である「三田尻御茶屋旧構内(英雲荘)」の管理・運営を行いながら、毛利邸の清掃を行ったり、市民対象の見学会を開催している。

日本史研究会(周南公立大学生)

周南公立大学で地域の歴史に関する実践学習に取り組むゼミ生等を主なメンバーとして令和6年4月に発足した「地歴研究会」が改称し、現在「日本史研究会」として活動している。市民や子ども達と共に地域の歴史を調べ学び、地域歴史の広報等に関する事業を行うことを目的としている。令和6年度は、防府の街なかを調査した内容をもとに『防府における商工業の歴史』を制作した。

山口県立防府商工高等学校

防府市にある、全日制商業科・情報処理科・機械科と定時制普通科を併置した学校。豊かな校風を継承するとともに、恵まれた地域資源を活用しながら、地域社会に貢献できるスペシャリストを育成している。同校と防府市は、学校運営協議会という協議機関を通じて、組織的・継続的な連携・協働体制を確立しており、教育課程の中に「総合実践」という科目として位置付けている。

きっかけ

周南公立大学の先生から防府市市民活動支援センターへ、「日本史研究会に所属する大学生たちが、防府市の商業の歴史を知るために街なか調査をしたいと言っているのでサポートをお願いしたい」という相談が寄せられたこと。

つなぎでのヒント



防府市
市民活動支援センター
センター長
京井 和子さん

周南公立大学に講演に呼んでもらったことをきっかけに大学の先生方とのつながりができました。そこで、日頃から先生方に、「もし、防府市で何か調べたいとか研究したいとかあれば、取材先などつないで全力でサポートをしますよ」とお声がけしていたんです。センターが探究型学習の支援を何でもしますという感じで。うちのセンターは、地元の商業高校や小中学校との連携はいろいろ実績がありましたが、大学はまだなかった。なんとか大学とつながることはできないか。そう考えて機会を捉えて声がけしていたのがそもそものスタートなんです。

つながりてコメント

困りごとの発見

防府市市民活動支援センターでは、周南公立大学日本史研究会の実践学習を、地域の団体をつないで協働してサポートしていこうと動きだす。



つなぎでのヒント



実は、この実践学習のサポートは、センターが直面している課題の解決にもつながると考えていました。

センターでは、まちを元気づけるためにも新たな人材や若い世代を市民活動に巻き込みたい、大学や大学生を市民活動に巻き込みたい、と常々考えていました。

隣接する山口市や周南市とは違い防府市には4年制大学がありません。でも、防府市在住で周辺の大学に通っている学生はいるはずだし、その子たちが地元でボランティアをするようになってくれれば嬉しい。そのために市外の大学に通っている大学生たちが集まってもらえる場づくりが何かできないだろうかと模索していたんです。

若者がまちに出て地域とつながれば多様な立場や世代間の人たちのつながる場ができ、地域のネットワークづくりになります。また、大学生が活動に入ることで、中高生には将来のモデルが出来ます。

今回の協働は、地域の団体と協働して周南公立大学の学生の実践学習をサポートしていくことでしたが、センターとしては周南公立大学とつながれたことが大きかったです。

つなぎでのヒント



つなぎ先・つなぐ視点

① 防府市観光振興課・商工振興課・文化振興課文化財室

調査対象の「人・場所・商工業」は防府市の大切な資源でもあります。そこで、取材先や歴史文化に関することのアドバイザーや仲介役として関わっていただけませんかとお声がけしようと思いました。

② 防府市内で長年商売を営んでいる商店

商業の歴史を調べるのであれば、市内で長年商売をされている商店や企業に話を聞きに行くのがよいのではないかと考え、「白石呉服店」「杉本利兵衛本店」「竹内酒造場」「吉末ガラス店」「さいとう玩具人形店」を取材先の候補としました。

③ NPO 法人文化遺産トラストほうふ

調査テーマが商業ならば、取材先には観光の要素も入れたい、商業と深い関わりのある防府の歴史・文化についてもぜひ調べて知ってもらいたいと考えました。元々この協働には市民活動団体を必ず入れたいと考えていたこともあり、つなぎ先には、防府の文化遺産の調査、保護、管理、啓発活動に関わっているNPO 文化遺産トラストほうふがよいのではないかと考えました。

④ 山口県立防府商工高等学校

防府商工高等学校とは実践授業のサポートで数年前からつながりがありました。今回の協働に高校生が参加すれば、高校生が県内の大学について知るよい機会になるだろうし、そこから学ぶこともあると思い高校に提案してみようと考えました。

協働のステップ

Step 1 つなぐ

防府市市民活動支援センターによるファシリテート 商店や団体を協働へとつないでいく

大学生の街なか調査の実施に向け、センターが持つネットワークを活用して調査協力を得られそうな商店や団体を訪ね、協働への声かけをしていく。



① 防府市観光振興課・商工振興課・ 文化振興課文化財室に協力を打診

大学生たちの街なか調査に先立って、市から取材協力先への声かけや、時間があれば取材へも同行していただけないかと打診

快諾を得る

センター単独でお願いしても協力してくださると思いますが、市も関わっていると伝えると協働への信頼度が増しますし、やり甲斐を感じて喜んでいただけます。今回のように街なかを訪ねて行う協働では、行政の協力も大事だと思います。

行政に協力をお願いする時、その目的と事前の情報提供と具体的な依頼内容をしっかりと伝えることが大事だと私は考えています。行政は本当にお忙しいと思うので。また、「もしもこれが成功したら、広報や会議で目一杯PRしてくださいね」と先方のメリットにつながる部分を意識してお願いするようにしています。

② 老舗商店に協働を打診

防府市内の老舗数か所に「大学生が防府の商業について調べたいと相談があったので、調査に協力してもらえませんか」と相談に行く。

快諾を得る

お願いに何うとどこも「喜んで手伝うよ」と言ってくださったのでとてもありがたかったです。若者が防府というまちや自分の店に興味を持ってわざわざ取材に来られる、ということが皆さんとても嬉しかったようです。

③ NPO 団体に協働を打診

NPO 法人文化遺産トラストほうふに取材協力を依頼する。

快諾を得る

防府の三田尻は昔、海運業で栄えたまちで、国の史跡「三田尻御茶屋旧構内(英雲荘)」のあるあたりがちょうどその地域になります。「英雲荘」は建物や庭園の整備が進み、NPO法人文化遺産トラストほうふが関わるようになってきれいに蘇りました。その市民活動の話もしてほしかったので、英雲荘を案内しながら、防府の歴史・文化・観光・文化遺産の保護や啓発活動などについて大学生に紹介していただくようお願いしました。

④ 大学生の街なか調査活動に 高校生をマッチング

山口県立防府商工高等学校に、大学生が防府で行う街なか調査に高校生たちを同行することが可能かを打診

快諾を得る

大学生の街なか調査は夏休み中に行うことになったので、「夏休みで時間が空いてる生徒がいたら参加してみてもどうでしょうか?」と担当教諭に相談したら、「それは高校生たちのよい経験になるだろうから、ぜひ」と言ってもらい、学校で参加希望の生徒を募っていただけることになりました。

Step2 コーディネートする

協働する関係組織との調整を図る

周南公立大学の学生たちは協働相手となる防府市内の商店や団体とはつながりがないため、取材全体のコーディネートは、各組織とのつながりをもつ防府市市民活動支援センターが行うことに。また、大学生の街なか調査に同行し、学生と取材先とを直接つなぐ役目も務めた。

つなぎでのヒント



調整の結果、取材日は、8/2・17・24・9/12・13 の5日間に決定。防府商工高等学校の生徒が調査に同行するのはこのうちの2日、高校が夏休み中の8/17・24 になりました。

防府商工高等学校の生徒たちには、大学生の活動を見て学ぶことで少し先の自分の未来を見据えてほしいと考えていました。

協働に参加した団体の声

山口県立防府商工高等学校

「高校生たちが県内の大学について知る、とてもよい機会になった」「近い将来の自分たちのモデルとなる大学生の活動を見ることができよかったと思う」

調査協力してくださった商店・企業

「防府の商業や自分の店の歴史を若者に知ってもらえてすごく嬉しかった」「学生さんたちが調査に来るということで、自分たちの店の歴史を改めて掘り起こすことができた。新たな発見もあったし、楽しかった」

NPO 法人文化遺産トラストほうふ

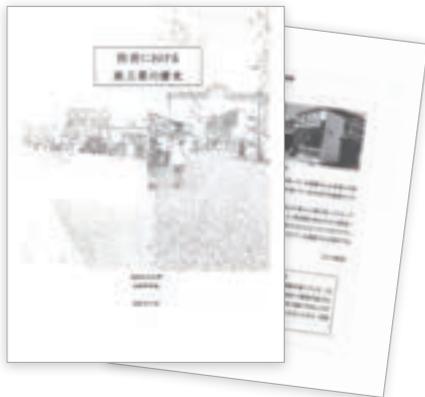
「活動テーマが歴史ということもあり、会員には高齢者が多くなかなか若者と関わる機会がなかった。今回の協働では若い人たちに防府のことを知ってもらおうことが出来てすごく良かった」

防府市観光振興課・商工振興課・文化振興課文化財室

「今回の協働で周南公立大学とのつながりが持てたことや、学生の声を直接聞くことができて良かった」

Step3 協働の成果を残す・広く伝える

① 冊子『防府における商工業の歴史』の制作



調査に携わった周南公立大学日本史研究会の学生と小林准教授が街なか調査の結果をまとめられ、『防府における商工業歴史』という冊子を制作されました。

防府市の商工振興課、文化振興課文化財室や観光振興課には関連情報の提供と冊子の監修にご協力いただきました。

出来上がった冊子は防府市教育委員会に贈呈し、市内の小・中学校でふるさと学習などの際に活用していただけるようお願いしました。

協働の成果物を冊子にしたので、協働に参加してくださったお店や関係者のお名前を後世に記録として残すことができました。皆さん、そのことを本当に喜んでくださったので、協働に参加していただけてよかったと思っています。

② 市民活動団体×まちづくり×文化観光
防府の街なか調査報告会の開催

今回の協働の成果を広く市民の方にも知っていただきたいだったので、2024年2月5日、センター主催で「市民活動団体×まちづくり×文化観光 ほうふの街なか調査報告会」と題して活動の発表とトークセッションを開催しました。

周南公立大学日本史研究会の大学生たちに街なか調査をまとめたものを報告してもらい、調査に協力してくださった協働先、NPO団体、行政、大学の方々にご登壇いただいて私がファシリテーターでつなぎました。夜の開催でしたが、行政の方、大学の先生、小中学校の先生などいろいろな方に来ていただき、実践学習のサポートや協働について知っていただくよい機会になりました。

Step4 次につなぐ

つなぎでのヒント



センターでは周南公立大学と連携し、令和6年度は日本史研究会による「防府の交通」をテーマにした街なか調査の実践学習をサポートしています。2年目は研究活動の資金となる助成金の獲得のサポートもさせていただきます。

さらに、周南公立大学の実践学習のサポートでは、「元気がなくなってきた防府の商店街の活性化を卒論のテーマにしたい」学生がいると大学の先生から相談があり、もう一つ別の協働もスタートしています。センターが防府市商工振興課や防府商工会議所に声をかけ、商店街の現状に関して意見交換を行う場を設けたり、商店街の現地調査に同行したりしました。

当初から願っていた「防府で大学生が活動する場」が生まれるようになってきたので、今後は周南公立大学だけでなく山口大学とか山口県立大学など近隣の大学に行っている学生とも協働していけたらいいと考えています。

また、周南公立大学日本史研究会の街なか調査での協働の成果が関係者に伝わり、小学校で「松崎子ども観光振興課」という名の授業を1年通してやることになりました。地域、団体、企業、保護者、山口学芸大学生、下関市立大学生等にファシリテーターとなって子どもたちの実践学習の伴走をしてもらっています。



協働を終えて・・・

防府市市民活動支援センター

センター長 京井 和子 さん



今はいろいろな意味で協働していかないと出来ないことが多くあります。最近では行政や市民から「市民活動支援センターでこんな事はできないか」という相談がよく寄せられるので、どこにつなげばよいのかということ常々考えながらやっています。今回の協働では、センターとしては大学とつながれたことが大きかったです。

市民活動支援センターの役目として、地域力を上げるコーディネートの機能が重要だと私は思っています。新しく創ることと同時にいまある資源とのマッチングなど「つなぐ」役割を果たしていくことが大事です。例えば、社会貢献したい企業がいたら「一緒にやりませんか」と地域と企業をつなげていく。高齢化で活動を止めたいと市民活動団体から相談があったら、団体のよいところや活動が途切れないように他の団体につないでみる。そういうことの繰り返しが必要です。一つの組織でやるのではなく、みんなと一緒にやることで自分たちの活動も相手の活動も広がっていきます。「他の組織が関わることで出来るが増えていく」ということが実感されると、またつながりは増えていき協働は広がっていきます。

その後・・・

本文にもある通り、当初は大学との協働による取り組みが派生して、別に地元小学校との協働にもつながっていきました。



古賀 桃子 / 特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター 代表

1975年福岡市生。学生時分まちづくりNPOを経て、2002年に現組織を設立。[草の根から、社会を描く。]を合言葉に、企業・行政・公民館・社会福祉協議会・児童館等の橋渡しや伴走支援を通じた、地域づくり・社会づくりの黒子に注力。近年は、防災や災害時の後方支援、大学での講義、テレビ局の報道番組レギュラーコメンテーター等も歴任。併せて「泡盛新聞」九州局長および「泡盛検定協会」会長として、沖縄県の産業振興にも注力。2024年4月より北九州市立大学大学院マネジメント研究科(専門職大学院/ビジネススクール)教授に着任。NPOと大学を両輪としながら人財育成や各種取り組みの支援に勤しむ。

【長門市】

NPO × 企業 協働の事例について

NPOと企業が協働して防災に取り組む際によくあるのは、「企業側が物資を提供し、プログラム運営はNPO側が全て担う」というケースです。一方で、今回取り組まれた長門の協働は、NPOと企業がゼロから話し合いを重ねて、「それぞれの得意技を活かしあっている」形になっている点が素晴らしいと思いました。

また、今回の協働を通してNPO側は活動の幅が広がったと言われていますが、企業側も日頃の業務では把握するのが難しいエンドユーザーやこどもの声に直接触れられ、防災グッズの改善点が把握できるよい機会になったと思われます。双方にメリットのあるwinwinの関係による協働だった点が印象的でした。

【山陽小野田市】

NPO × 企業 協働の事例について

全国でも、地域に根差したプロスポーツの取り組みは多様に見受けられます。その多くで地域貢献・地域連携がよくうたわれていますが、具体的に各地域でこういった貢献・連携につながるができるのか、試行錯誤されているようです。

一方、今回の協働ではNPO側でも「こどもたちが地域にいる大人の中で活動する場がない」という課題をもとに関わっておられます。その点では、「不足している・課題を持っていることからの組み合わせ」で成立した協働とも言え、そこをセンターが間に入りうまくマッチングされたように見えました。上記した長門市の「協働する双方が既に持ち合わせていることを活かしあう」ことで展開された協働とも少し異なるパターンの事例だったかと思えます。

【山口市】

NPO × 大学 × 企業 などマルチな協働の 事例について

山口市センターが、外部(県民活動支援センター)と連携しつつコーディネート役として全体を支えることで、多様な主体による多様な連携が成立した点は素晴らしいと感じました。たとえば、青少年育成の活動をする際の心得として「手を放しても、目を離さないよう」というフレーズがありますが、今回のケースでもセンターがNPOを支えつつも依存関係にならないことに意識を持ちながら伴走支援をされてる様子が伺えました。

また、各自治会や町内会の多くでは、高齢化や担い手不足などを背景として新たな繋がりづくりが難しい状況のなか、この取り組みは「NPOがプロジェクトを起こしてコミュニティにそれが受け継がれる」という形に着地したことが興味深く、地縁と志縁(コミュニティとNPO)の新しい連携の形が見える感も覚えました。

【防府市】

NPO × 教育機関 協働の事例について

最初は、防府市センターに大学から調査協力の依頼があったことから始まり、それが当初の案件の当事者だけでなく、地元の高中生や小学生まで取り組みの輪が広がっていったことがとても面白い事例だと感じました。

この「広がり」を得られたことについては、防府市センターが直接的に各方面の主体をつないで事に当たるだけでなく、関係者を招いた活動報告会を開催して様々な立場の参加者に向けてその取り組みや繋がり的情報を共有したり、積極的に外部へ関連情報を公開したりする点は重要だと思います。中間支援組織が協働をコーディネートする意義の一つは「参加の場を開く、参加の間口を広げる」という点にあります。そのためのしかけを防府センターが自ずから取り組まれていた様子は、学びの深い点です。

本紙作成にあたっての参考文献・資料

- 認定特定非営利活動法人日本NPOセンター、
特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター
『くらし×〇〇 つなぎの手帖』 2019年
- 徳田太郎・鈴木まり子
『ソーシャル・ファシリテーション「ともに社会をつくる関係」を育む技法』
北樹出版、2021年



付 録

本紙は、山口県「協働ネットワーク強化による県民活動促進事業」の一環で作成したのですが、一部本紙の情報も盛り込みつつ、同事業の様々な取組みを通して収集した協働（ファシリテーション）のノウハウを整理して紹介・共有する研修も開催しました。その研修で用いたテキスト資料を付録としてお示しいたします。下掲の2次元バーコードからご覧ください。



2025年3月14日開催

「協働を一步進めるためのノウハウ習得セミナー」

（主催：山口県 企画・運営：特定非営利活動法人やまぐち県民ネット21）

<https://blog.canpan.info/yamanet21/archive/74>



協働ファシリテーションの検討ワークシート（PDF）

<https://x.gd/msu4V>



発行 令和7年(2025年)3月

発行

山口県 環境生活部 県民生活課 県民活動推進班

〒753-8501 山口県山口市滝町1番1号

Tel:083-933-2614 Fax:083-933-2629

企画編集

特定非営利活動法人やまぐち県民ネット21

〒753-0091 山口市天花1丁目11-21 ストークハイツ201号

Tel 083-921-2437